

私が、い金井の農地を守り、 こどもたちに手渡したい理由

まあるいのうэн 渡邊 裕樹

1. 変えなければいけないのは、学校ではなく、町ではないか？

「こどもたちが遊ぶように夢中に学ぶことができる時間をつくりたい」

そんな願いで、私は小学校の教員になり、そして約10年間国公立の小学校に務めました。公教育の現場の中で目の当たりにしたのは、土が嫌いなこどもたち、虫が嫌いなこどもたち、野菜が嫌いなこどもたち。木に登ったことがない、刃物を使ったことがない、火を見たことがないこどもたちでした。

現代の生活では、それも当然とも言えますが、生きていく上で根っこになる幼少期に、からだ全体で得られる「原体験」が乏しい現状に、何となく危機感のようなものを感じました。教育業界では「生きる力」というキーワードが叫ばれますが、そもそも、こどもたちは生まれながら様々な「力」をもっていて、そんな「力が生きる」チャンスが、あまりにも少ないように思えたのです。

そこで私は、学校の授業を使って、こどもたちにとにかく夢中で遊んでもらうようにしました。校庭に穴を掘りました。焚火をしました。校庭に小屋を建てました。できるだけ土や自然物を使って授業をしました。こどもたちに鉛筆をナイフで削ることを教え、時にはナイフの研ぎ方も教えました。炭火の起こし方を教え、粘土の野焼きのやり方を教えました。それも手取り足取り教えるのではなく、できるだけ自分たちなりの自由な方法で試してもらうようにしました。次第にこどもたちは失敗を恐れず、自分たちでやりたいことを起こし始めるようになりました。

同様の危機感をいだいているのは私だけではなく、多くの年配の先生たちは「どうして、私たちがこどもの頃、小学校にあがる前に遊びの中で経験していたことを、今の子どもたちは経験してこないんだ？」と嘆いていました。一方、若手の先生たちの中には、「土汚い・虫嫌い・刃物怖い」という方も少なくなく、こどもたちの生活の状況を危惧することもなく、そして次第に状況を憂いていた年配の先生方は退職していき、教員は低年齢化を続けています。（若返っていると考えれば希望でもあります！）

こどもたち（大人も含めて）が生活の中で、遊びを通して土に触れたり、身近な自然に関わったり、手やからだ全体を使うような経験の機会は、（今に始まったことではありませんが）減り続けています。これから、生活のあらゆる場面でテクノロジーのデジタル化が浸透し、AIも活躍をしていく時代の中で、ますます人がからだを通して体験することや、その中で得られる実感が大切になっていきます。いったいどうしたら、そのような原体験やそのための環境をつくることができるのかとずっと考えていました。



ある時、学校で一人の子と話したことが、今でも強く印象に残っています。

学校からなかなか帰ろうとしないその子に、「早く帰って友達と外に遊びに行けばいいじゃない」と気軽に言った時、「帰っても遊ぶ人いないし、遊ぶ場所ないもん」というのです。詳しく聞くと、みんな学童保育や習い事で予定が決まっていて、ただ遊ぶということができない。そして近所の公園はつまらないというのです。後日、学校の近くの公園へ行ってみると、驚いたことにこどもが一人もいない。もっと驚いたのは、草が一本も生えていないし、中には土すらない公園もあったのです。入り口の看板には「ボールで遊ばない」「大声を出さない」「花火や火を使わない」と書かれていました。いったいこの公園で、こどもたちはどうやって過ごせばいいのだろうかと思いました。

そんな状況を目の当たりにしてから数年たち、その頃生まれたばかりの子が1年生にあがってきて、1年生があつという間に6年生になって卒業していくのを見てきました。「まず変えなければならないのは、学校ではなくて、こどもたちの住む町なのではないか？」と思うようになりました。

2. 農地はたくさんあるのに、 こどもたちが土に触れる場所がない！

時を同じくして、私は自分が住んでいる小金井の町に、たくさんの「生産緑地地区」が存在すること、そしてそれが次第に宅地化されていることに気がつきました。

こどもたちが土に触れたり秘密基地を作ったりできるような、自由な遊び場がない状況にいるのに、農地が宅地化されているなんて、なんともったいないのだろう(しかも、その宅地化された住宅にこどもたちが次々と越してくるなんて！)と感じた私は、一枚の企画書を持ってある農家さんを訪ねました。「畑の一角で週末のこどもたちの遊び場にさせてください」と提案をすると、その場で「ぜひ使ってください！」と快く引き受けてくださいました。その農家さんとは小金井市東町で農業を営む萩原英幸さんでした。その夏は、コロナ禍で遠出ができなかったこともあり、たくさんのこどもたちが毎週末、萩原さんの畑へ集まって一緒に畑仕事をしたり、小屋を建てて遊んだり、虫を捕まえたり、採れたて野菜でご飯を作って食べたり、野菜の販売を手伝わせていただいたりと、貴重な体験をたくさんさせていただきました。

萩原さんは「こんなに喜んでもらえるなら、他の畑でもできるようにしましょう」と農家仲間にも声をかけてくださり、JAとも連携を取りながら、市内のいくつか農家さんの畑で月1回の「畑のアトリエ」を実施させていただくことにもなりました。最初の1時間を畑仕事のお手伝いをさせていただき、後半の1時間を「畑遊び」の時間とさせていただいたのです。農業には農作業だけでなく、調理や加工などの手仕事の側面もあり、採れたて野菜でジュースづくり、火起こしを

しての蒸し芋、落ち葉焚きを囲んでの焼き芋、養蜂の採蜜やニワトリの餌あげまで貴重な体験をたくさんさせていただきました。

農家さんたちのご理解とご協力により「農地の遊び場」づくりが実現できたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。そんな気持ちを萩原さんに伝えると、意外な答えが返ってきました。「俺らも、これから農地を維持していかなくちゃいけないから、こどもたちに手伝ってもらったり、畑に来てもらえてありがたい」というのです。

それまで大切な農地の一角を、1ヶ月に1回でも、こどもたちの遊びや体験の場として使わせていただき、畑仕事も教えてい

いただき、いただければいいと思っていたのですが、実は農家さんにも、農地を使ってもらうメリットがあることを知ったのです。その後、萩原さんと何度も話をしていく中で、都市農地の現実が私にもわかってきました。



実際に農地は減り続けています。全国で1961年をピークに2021年までの60年で174万ha(全体の3割以上)が工場用地や道路、宅地に変わりました。東京都は全国で最も農地の減少率が高く、2021年までのたった10年間で23%の農地が減少しています。小金井市について見てみると状況はさらに深刻で、1993年の125.4haから2019年の68.2haへほぼ半減しています。(小金井市ウェブサイト農業委員会の資料より)

全国的に農業就業人口も減少を続けており、離農する農家の農地に対し、地域の担い手(農家)だけでは受け入れが限界になっているのが現状です。その結果、さらに農地は宅地化を避けられない状況にあるのです。(『使いきれない農地活用読本』農山漁村文化協会、p4)

都市における防災や環境保全などを目的に、農地を維持するため「生産緑地地区」に指定し課税優遇をする制度があります。今ある農地の多くが、1992年の改正生産緑地法に指定されてきましたが、その営農義務の30年期限が終わる2022年に大量に生産緑地が減少し宅地化されることが懸念されてきました。「生産緑地の2022年問題」と呼ばれ、期限に向けての農地の減少は著しく、その問題を契機に、法改正も行われ、多くの農家さんが農地の利活用を検討してきました。

そんな状況の中で、萩原さんも、維持できなくなった近隣の農地を貸借制度を利用して借りることで、そこで給食用の野菜を育て、農業に関心のある市民を巻き込みながら、市内の国公立学校の野菜の自給率をあげるという取り組みを進めているのです。

3. 今 こどもたちには「畑」が必要！

こどもは土が好きだった！

2020年から、萩原さんの畑をはじめ市内の農家さんの畑を活用しながら実施させていただいてきた「畑のアトリエ」。その活動の中で私は、あらためて「畑」がこどもたちに必要な場所であると感じました。

まず、こどもたちは土が大好きであるということを再発見しました。

以前小学校で出会った土に触れたがらないこどもたち同様、最初は「気持ち悪い」「汚い」と言っていたこどもたちも、畑で過ごしていく中で自然と土に触れ始め、やがてずっと触っていたくなりました。どうやら、頭では「気持ち悪い」「汚い」と思っている子も、からだでは喜んでいるようなのです。この頭(理性)と身体(感性)がバラバラになってしまっている状態が「土嫌い」を生んでいるのだと思いました。だからこそ、成長とともに知識や理性が育っていく幼少期や小学生(できれば低学年)のうちにこそ、からだを使って「気持ちいい!」「楽しい!」という原体験をすることが大切なのだと思います。

畑で過ごし遊んでいるこどもたちは、土を見つけるとまず必ずと言っていいほど「穴」を掘ります。手を使ってでも、枝や石を使ってでも、穴を掘り始めます。シャベルを用意しておいたら間違いなく掘ります。

造園技士の矢野智徳さんは、地面に掘られた穴(点穴)が大地の循環の血管であるという話の中で、虫は葉っぱや土に穴を掘り、動物も土に穴を掘る。それは動物の本能であり、地球を維持するための行為にもなっていると言います(映画『杜人』より)。おそらく、人間も穴を掘るという本能がある(あった)のだと感じます。入るため、何かを埋めるため、植えるため、掘り起こすため...目的は何にせよ、目的などなくとも掘るのだと思います。穴を掘ることは、自分が手を加えた分だけ地形や環境が変化する「手応え」を得られます。「手応え」とは生きていくことの実感でもあります。



今、人が穴を掘っていい環境が街の中にはほぼありません。学校の校庭もちろん掘ったら危険だからだめ、学校の砂場も(体育で使うなど)目的があるから普段はだめなことも多い。公園も同様。家に庭があるならまだしも、マンション住まいではまず無理。す

るとそんな本能も芽生えず、喜びも味わわずに生きていくことになります。

同じことは、土だけではありません。こどもたちは、畑で過ごす、草花を集める、草花の蜜を吸う、草花の実を食べ、「甘い」とか「まずい」といって、遊びます。それをすりつぶしたり、水につけてお茶やジュースに見立てたりします。さらに草花を目がけてやってくる虫や小さな生き物をつかまえはじめます。てんとう虫、カマキリ、バッタ、アオムシ、トカゲ、ヤモリ、カエル、いろいろな幼虫やダンゴムシ、ミミズ…。生き物と出会い、つかまえて触れたり、追いかけてたりします。それもみんな本能的な行為であり、生きる喜びそのものです。

そういう自然が、こどもたちの生活圏の中のすぐ目の前の「畑」にあることを知ったのです。わざわざ週末に遠出してアウトドアレジャーに出かけたり、YouTubeで検索して観察したり、ゲームの中でモンスターを集めたり、擬似世界のワールドに穴を掘って遊びばなくても、こどもたちの家の半径1km以内(概ね歩いて行ける範囲)に、リアルな自然があるのです！ そんな身近な自然でもある畑が、こどもたちの生活には必要です。

こどもは野菜が大好きだった！

そして、さらにこどもたちは野菜が大好きだということがわかったのです。畑のアトリエの初日、さっそく採れたての野菜を食べようというと、「ナスは嫌い」「トマトは食べられない」という子が数名いました。自分で収穫したのだから食べてごらんと促しても、一口食べてみて「やっぱりだめ」。ところが、萩原さんの畑に1ヶ月週末に通い、その中で過ごし、収穫だけでなくそれを販売する体験もした子たちは、その後の畑のアトリエの時や、家に帰ってから「食べられるようになった！」と伝えてくれました。

萩原さんの育てた野菜だから美味しいんだ、とか、自分がお世話をした畑だから食べられる、とか。不思議なのですが、関わることで畑の土やそこから生まれた野菜は、「自分の分身」のような存在に変わり、おいしく感じるようになります。さらに、私の娘を含めて畑のアトリエに参加した子たちの中には、それまで嫌いだった野菜が、一番好きな野菜に変わってしまったという劇的な変化もあり、驚かされました。

野菜が嫌いな子が増えているといいますが、実は、野菜が嫌いになったのではなく、土や畑という野菜が育まれる環境との距離が生まれてしまっているだけなのではないでしょうか。生産者の顔が見えない。畑という場所のイメージがわからない。そもそも野菜を育む土が嫌い。そんな「土と自分との距離感」が、野菜嫌いを生んでいるのかもしれないと、私は考えるようになりました。

さらに興味深いことに、畑のアトリエ参加者のお家の方からは、畑のアトリエに参加した日はこどもが早く寝る・良く眠るという声をたくさん聞きました。土や植物、生き物に思い切り関わり、様々な手応え・実感を感じたこどもたちは、自分を取り巻く環境とつながっている安心感を得られるからか、あるいは身体全体を使って疲れただけかもしれませんが、よく眠ることができる。結果的に、こどもたちの健康にもつながることになるのかもしれません。

こどもたちにもっと畑に関わる機会が必要だという思いは、確信に変わりました。

4. こどもたちに必要な「農時間」=「宇宙時間」

1年間畑で過ごす「こども農園」がスタート

「畑のアトリエ」の取り組みには課題もありました。それは、収穫や調理や販売など、農業の中の一番「おいしい」ところだけをこどもたちが体験しているということ。いわば「いいとこ取り」の体験になってしまっていることです。いただいている野菜はもちろんおいしいけれど、その野菜を汗水流し苦労して育てたのは農家さんです。だからもちろん感謝の気持ちを伝えるわけですが、その感謝の気持ちというのはその苦労を知らなかったら本当の意味でわかりません。

そんな課題感も重なって、こどもたち自身が土づくりや種まきから日々のお世話をして、最後に収穫・調理・加工・販売までトータルで体験できるように、1年間を畑で過ごせる場所「こども農園」が2021年の3月に東京都の農業振興

事業「わくわく都民農園小金井」の一つの事業として小金井市内でスタートし、私が当時所属していたアトリエが担わせていただくことになりました。

こども農園では、週に1回のペースですが、こどもたちが1年間畑で過ごします。1年の活動を通して、まず実感したのは、季節の移ろいを肌で感じられるということでした。夏は暑く冬は寒い。夏至に向けて日が長くなり、冬至に向けて日没が早くなる。当たり前といえば当たり前ですが、室内で室温も明るさも常にコントロールされている環境が増える快適な現代では、案外感じる機会が減っていたことに気づかされます。冬期の夕方、できるだけ外で過ごしたいこどもたちは、日没後も徐々に暗くなっていくので目が慣れて、ぎりぎりまで室内に入らず粘ります。収穫や穴掘りに夢中になっていて、ふと視線を上げると夜だった！という「たそがれどき」の感覚は、畑のような場所でないと感じることはないかもしれません。

また、季節に応じた農作業は、カレンダーや時計のなかった時代から続けられてきたため、季節と密接に関わっていることを知りました。日本には昔からのこよみとして、二十四節気や雑記があります。例えば、立春から数えて88日目にあたる「八十八夜」は、茶摘みの歌にも唄われますが、昔から農家さんが田植えや苗植えを始める日とされています。この日を境に、霜が降りることがないというのです。それに倣って、こども農園では毎年、八十八夜に一番近い実施日に苗の植え付けをしています。

また3月20日頃と9月20日頃の年に二度の「社日」は、これから畑に作物を育て始めるため、半年の豊作を祈って土に感謝の気持ちを伝える日です。こども農園でも、この日には土の山をつくってしめ縄を飾り、穀物やお酒をお供えして「ありがとうございます」「よろしく願います」と土にご挨拶をします。そんな「農」の中に流れる時間は、現代を生きるこどもたちに必要な時間感覚のように思います。



動画再生を倍速で見たり、飛ばしたければいつでもスキップが可能な「タイパ(タイムパフォーマンス)」が大事にされる昨今。そんなスピード感で生きている大人もこどもも「待つ」ということがなくなっています。そんな現代を「待つことができない社会になった」と臨床哲学者の鷲田清一は指摘します。(鷲田清一『「待つ」ということ』)また、鷲田は「ものを長い目で見る余裕がなくなった」「短い期間に「成果」を出すことが要求されるようになった」とも書いていますが、まさにこどもたちは日々そのような「すぐに成果が求められる」「すぐ結果を出さなければいけない」風潮にさらされ、(大人になったら大丈夫だからというような)長い目で成長を待ってもらえず、気がつけばこども自身も待つことができなくなっ

ているようにも思います。

1年目、畑で種を播いて1週間後にまだ芽が出ていなかった時に「あーあ、失敗しちゃった」「もうだめだ」と投げ出してしまふ子もいたのです。でも、発芽には10日から2週間がかかる、気温や天候によっては3週間かかることもあるのです。芽が出てから、さらに本葉がついて花が咲いて、そして実がつくまでには、そこからさらに1~2ヶ月。長いものと4~5ヶ月以上もかかるものもあります。そんな「長い目」を必要とする「息の長い」農に流れる時間は、今だからこそ、こどもたちには必要だと思います。

社会である前に、地球であり宇宙であること

いじめや不登校、ひきこもり、学力格差、発達障害など、こどもたちを取り巻く多くの課題は「人間関係」や「集団生活」という学校を中心としたこどもたちが生きる「社会」の中で生まれています。かく言う私自身もこどもの頃、学校の勉強についていけずに宿題をやらなかったり、忘れ物ばかりしていて、先生に怒られて落ち込んだり、いじめられて幼稚園に行けなかったりということが心の傷になりました。しかし、私の住む街には「草っぱら」や「雑木林」といったいわば「空き地」があったり、家の裏には誰のだかわからない「畑」があり、そこへ行って虫やトカゲを追いかけたり、草を

摘んだりしていたら、嫌だったことはすべて吹き飛んでしまっていました。植物や虫、動物という「自然」と出会い、付き合うことは、人間が住む「社会」とは別のもう一つの時間を過ごすことでもあります。それが本来の地球のもつ時間で、人間が社会人である前に地球人である限り、絶対に必要な時間なのです。

都市化が進み、こどもたちは生まれて間もなく「都市のロジック」「社会のルール」に閉じ込められてしまうようになりました。そんな社会の中でどんなに辛いことがあっても、苦しいことがあっても、身近な自然と、そこで流れる時間に「帰る」ことができたなら、多くのことは「どうでもいいや」「大したことない」と安心できるはずです。そんな自然は、今や週末か夏休みにどこか遠くの田舎や旅先の特別な場所にされてしまいました。でも、それではこどもたちはいざという時に逃げ込めない。だからもっと身近なところに必要なのです。

畑という場所や、そこで営まれる「農」に流れる時間は、そんな「地球時間」あるいは「宇宙時間」をこどもたちにもたらしめます。「もっとゆっくりでいいんだよ、のんびりやっていて大丈夫だよ」と地球(土、植物、生き物など)がこどもたちに教えてくれるのです。

5. 今、こどもたちには「農」が必要!

「思うようにいかない」という農の可能性

1年間の「こども農園」を通して、「農」の活動がこどもたちに必要だとますます感じるようになりました。まず、半分は自然の営みでもある「農作」は、とにかく「思うようにいかない」ということ。

種を播いて2週間でようやく発芽し、植え付けを終えてさあこれから!という時、とうもろこし(ポップコーン)の可愛い苗が、カラスたちにイタズラで引っこ抜かれて枯れてしまうという事件が起こりました。

また、大きくなってきたトマトがもう1週間で収穫できると待っていた矢先、雨に打たれて割れたところから虫が入り翌週には食べられない状態になってしまったという事件。キュウリができすぎてしまい、1週間で巨大化してしまったり、採れすぎてしまって痛んでしまったりという問題も発生しました。スイカの苗の継ぎ目が、風で折れてしまった事件。虫に葉っぱを食べられて穴だらけ事件...次から次に「思いもよらない」「想定外」の事件が起こるのです。

先述の「都市のロジック」「社会のルール」の話にも通じますが、こどもたちを取り巻く現代の暮らしは、「思い通りになる」のが当たり前。予定通りにコトが運び、予定調和に時間割りがこなされていくのが普通。「計画」があってその達成度が「評価」できるのが当たり前。その確かさとスピード感がよしとされています。でも、自然界では、人間の思い通りになることの方が少ないのです。そんな「想定外」の事件が、こどもたちの創造力や創意工夫につながったり、野菜への思いがより強くなって結果的に採れた野菜がおいしく、大切に感じられるようになったりします。

ポップコーンが抜かれた事件は、「カラスどうする問題」として話し合いをし、カラスを捕まえるとか、畑で猫を飼うとか、突拍子もないアイデアも出た末、かかしをつくる、キラキラ反射する素材を設置するなどの現実的な策に落ち着き、「キラキラかかしづくり」が始まりました。

トマト虫食い事件やキュウリ熟れ過ぎ時間は、もったいないからと虫食い部分を取り除いたトマトや大きくなりすぎたキュウリをジャムに加工して、夏休みのかき氷にトッピングして食べることに。

スイカが折れた事件は、新たな苗を植える際に「お布団」となる藁が大切であることや風や虫から守るトンネルネットが必要であることなど、農作業にとって必要な「お世話」があることをこどもたち自身が実感をもって理解するきっかけをくれました。そして、それらのお世話を通して、それまで以上にスイカに対する愛情が増していくのでした。風、天候、虫、動物、病気...自然相手に起こる様々な「想定外」こそが、こどもたちに学びを起こします。



幼児教育の世界でここ10年注目されてきた「プロジェクトアプローチ」や、学校教育でも大切な考え方になっている「学びのプロジェクト(探究)化」(自分たちなりの問いを、自分たちなりの方法で、自分たちなりの答えにたどり着く)では、プロジェクトの中で生じる様々な「課題」を乗り越えていくプロセスこそが学びであると考えます。つまり目標にたどり着くまでの「紆余曲折」「寄り道」が多様なほど、学びは深まり、目標達成の喜びも実感も大きくなるということです。これまで、私は学校教育の中でその手段として「造形活動」に大きな魅力を感じて実践をしてきましたが、自然を相手にした「農」は、さらに深みのあるプロジェクトを可能にすると感じています。

自給自足の学び

そしてもう一つの「農」の魅力は、何といっても「食べられる」(エディブル)ということ!「食べる」つまりそのまま「生きる」と直結している、ということです。

上に書いた「プロジェクト学習」の起源をたどると、哲学者のジョン・デューイが20世紀初頭に打ち出した「アクティブ・オキュペーションズ(活動的な仕事)」という考え方にたどりつきます。デューイは、自動車工場をモデルにつくられた近代の一斉教育(マスメデュケーション)に対して、「手仕事」「作業」を通した学び(learning by doing)という考えを広め、実践しました。その「作業」の中身である「活動的な仕事」とは、実用的な知識や技能の学習ではなく、人類が歴史上たどってきた手仕事することだといえます(「胎芽的生活」とデューイはいいます)。それはまさに「農業」であったり「大工仕事」であったり、「火起こし」「調理」「織物」「裁縫」「陶芸」など衣食住に携わることです。

デューイは今から100年以上前の黎明期の学校を問い直すための論考の中で、「活動的な仕事」を学びの基礎とすることを訴えましたが、都市化、デジタル化が高度に進んでいる現代にこそ、ますます「活動的な仕事」の重要性は増していると思います。「農」を営み、自分たちの食べるおやつやご飯を自分たちでつくること、自分たちの居場所を自分たちで創意工夫して手で作ること。そんな「原始的」な、いわば「自給自足」の営みが、こどもたちの生活を豊かにし、楽しく面白くしていくし、深い学びにもつながっていくのだと思います。

1年間のこども農園を終えた最終日、こどもたちに「1年間で何が一番楽しかった?」と聞くと、多くの子が「流しそうめん(流し野菜)」と答えました。近所の農家さんの竹林へみんなで行き、大きな竹を切り倒し、それをみんなで力を合わせて割って、節目をとり、流しそうめん台をつくりました。そして、残った竹で蕎麦猪口と箸を手作りで作り、素麺を茹でて、畑に実った野菜を薬味にいただいたのです。

自分たちで育てた、つくった、やり遂げた。そして、それを食べて「おいしい」と思う。あまりにもシンプルで当たり前のことですが、それが「生きている」という実感です。「生きていてよかった」「生きてきてよかった」そう思える瞬間が一瞬でも生まれるなら、そこは、その子(人)にとっての「居場所」になるのだと思います。

6. だから今、畑と農を、こどもたちに!



そんな魅力的な「畑(農地)」と、そこでの営みである「農」を、もっともっとこどもたちに開放していきたいと、改めて考えるようになりました。

現在(2023年)で2年目を迎えた「こども農園」ですが、農作物を育てることがメインの活動のため物理的な「生産面積」が必要です。現在の120平米内で、定員や実施回数を増やすことが難しいのが現実です。また、1年間トータルで体験を積み重ねたり深めたりしてほしいので、会員制で同じメンバーに1年間は関わってもらいたい。そうするとどうしてもごく限られた子だけが参加

する「閉じた活動」になってしまいます。

そこで、現在のこども農園を一つのモデルとして、もっと他の農地にも、この活動を広めていきたいと考えています。一つは、第2・第3のこども農園の拠点を、市内近隣の農地を借りて実施すること(拡大)。もう一つは、自分たちの活動をモデルにしてもらいながら、他の団体や自治体にも「こども農園」の実践を増やしてってもらったり、考え方を広めていきたい(普及)ということです。

また、こども農園は放課後の時間に実施することで、こどもたちの放課後の居場所として学童や習い事のように活用されていますが、参加者の中には、不登校の子も少なくなく、こども農園が唯一の行き場所となっている子もいます。そのような状況を見ても、放課後時間にこだわらず、午前中や日中に開放をし、不登校やホームスクーリングのこどもたちにとっての遊びや学びの場、居場所としていくことも必要であると思います。

一方で、学校での学習の中の、2年生生活科や3年生社会科などでの農に関わる学習が、こどもたちにとって深い学びや体験になっているのか？ というと、これも現場では、教材キットでのトマト栽培だけで終わらせてしまっていたり、農家さんの畑を見学するだけ、収穫体験するだけで終わらせてしまうなど、もったいない状況であることを思うと、学校の管理職や教員に対しても「こども農園」の考え方やノウハウを届けられるサポート体勢、協力体制がつくるも必要です。事実、学級園など学校内の畑が荒地化したり、物置にされていたりするケースも増えています。それはもったいない！

私が現在講師で勤務している小学校では、教室にいつらさを感じる子が支援員とともに、学校菜園で虫を探したり、土に触れたりして過ごしていることで、自分の気持ちを落ち着かせて自分のペースで教室に戻ってくることができる環境があります。また、不登校の子も、お母さんと一緒に学校菜園にだけは来られるというご家庭もあります。私がそこで腐葉土の中にたくさんの「菌」が住んでいることと、その見つけ方を伝えたところ、彼はその「糸状菌」を袋いっぱいを持ち帰り、家に畑を作り始めました。それも立派な学びではないでしょうか。学校で、こどもたちの学び、遊び、体験、癒しの場でもある、菜園や農園をちゃんと整備して生かしていくことも必要なのです。(私の娘の学校は、学級園とビオトープをつぶして校舎を増築しようという話がもちあがったこともありました。汗)

さらに、こども農園のように1年間をトータルで、という発想に止まらず、単発での「畑のアトリエ」のようなイベントも、関心をもってもらうことや、探究や学びのきっかけをつかんでもらうという目的で、同時に必要です。それは「こども向け」に止まらず、大人こそ欲している体験かもしれません。こどもの「息の長い」遊びや体験を見守ることのできる、大人の「考え方」も大きな鍵です。

7. 農を新しい遊びとして再発見

そもそも「農」とはなにか？

実は、こども農園を実施して1年が過ぎたところで、大きな課題が見えてきました。それは、いくつか失敗はあれど「上手くいき過ぎた」ということです。私たち(スタッフ)も、1年目だからわからないことだらけで、収穫物、いわば生産高という成果が出ないとマズい、失敗だ、という気持ちが先走ってしまったのです。そのため、当初からプロの農家さんに農業にかかわるプラン(何を育てる、どうやって育てる、栽培計画)をお任せし、こどもたちに月に1回指導に来ていただいたのです。こどもたちも私も、農家さんに教えていただいた通りに堆肥と肥料をまき、畝をつくり、指定の色のマルチをかけて支柱を立て、お世話をしました。すると、「なんでかわからないけど」うまくいったのです。しかし、「うまくいった」にもかかわらず、こどもたちの「収穫」への喜びが今一つ。それに、野菜への思いや愛情が今一つなのです。

この「なんでかわからないけど、うまくいった」ということが、こどもたちにとっての、野菜を育てたという実感を感じづらくしてしまった原因でした。農家さんが悪いわけでは全くなく、農家さんにどの部分をどのくらい教えていた

だか、そしてそれをどのようにこどもたちに届け、体験してもらうか、という目的の整理と、計画と方法に問題があったと反省しています。はっきり言えば、私自身の勉強不足でした。

そこで、私は「農」について、改めて勉強を始めました。野菜とはそもそもなんなのか？ 野菜は野草と何が違うのか？ 野菜が育つ土とはどんな土なのか？ そもそも土ってなんなのか？ 土にはどんな微生物が住んでいるのか？ 微生物はどこからやってくるのか？ 畑の害虫は本当に悪なのか？ そもそも農業は地球に優しいのか？（そもそも、農業や畜産などが始まって高々数千年、人類はそれの数十倍以上の時間を狩猟採集で生きてきました！！）わからないことだらけでした。そして知れば知るほど、農の魅力に引き込まれていきました。

追究していったわかったのは「農」は、生きるための人為的な営みなので、自然とは対義的なものだということ。一方で、野菜の原種である「野草（雑草）」は自然の力で生えてくるから、野菜とて自然に他ならないこと。つまり「農」は、自然と人間の「駆け引き」なのです。さらに、野菜をつくるために必要な栄養素はその大半が土中から得られますが、その栄養素をつくり出す小さな土壌動物や微生物が生きるために必要なものが、野菜（の枯れたもの）です。野菜と土とは相互依存的に「与える与えられる」という関係にあるのです。その野菜をいただく私たち人間は、野菜をまた育てるために、いただいたものの代わりに何かを地球（土）にプレゼントしなければいけない。かつて江戸時代の日本では、そのプレゼントは「うんち（下肥）」でした。人間（動物）と野菜と土が、お互いに与え与えられるという関係の中で「生態系」が成り立ち、美味しい野菜が育ち、健康な体が作られる。考えてみたら当たり前のことです。人間以外の動物すべてが今でもその循環の中にいます。



ところが、衛生的な問題から、下肥であった糞尿を肥溜に貯めず、水洗で処理され1箇所に集められて、人為的な仕組みの中で「微生物」たちに浄水をしてもらい、川へと流されるようになりました。その結果、畑は栄養不足となって「肥料」が必要となりました。

でも、この「うんち」か「肥料」かという両翼の間には、様々なグラデーション（自然由来の有機物と科学的無機物のグラデーション）があって、動物のうんち、家庭で出た残菜・生ゴミ、工場から出た生ゴミ（米糠、もみ殻、油かす）、落ち葉、刈った雑草、腐葉土、培養土、有機肥料、化学肥料というように、選択肢は様々です。

でも、この「うんち」か「肥料」かという両翼の間には、様々なグラデーション（自然由来の有機物と科学的無機物のグラデーション）があって、動物のうんち、家庭で出た残菜・生ゴミ、工場から出た生ゴミ（米糠、もみ殻、油かす）、落ち葉、刈った雑草、腐葉土、培養土、有機肥料、化学肥料というように、選択肢は様々です。

土壌には目にはほとんど見えませんが、信じられない数（ひとさじに一億ほど）の微生物が住んでいるといえます。それを知ると「土」が生き物のように感じられます。「土」が生き物であるというストーリーをこどもたちがイメージするだけで、土への関わり方は大きく変わります。

私が関わった小学校では、相変わらず「土が嫌い」という2年生とたくさん会いました。そこで、この「土にはたくさんの小さな虫さんやキンちゃん（微生物）が住んでいるんだよ。虫さんやキンちゃんたちは、ご飯が食べたいんだけど、なんだと思う？」という話をし、みんなで学校の中からキンちゃんが好きそうなものを探してキンちゃんたち（見た目はただの土です）の上に、それをのせてあげました。すると、1週間後に虫さんやキンちゃんが好きなのはすっかり姿形が変わっていて、1ヶ月後にはほぼ土の色になっていました。プラスチックや石は全く変わらず、虫さん・キンちゃんは好きじゃないことがわかりました。

そんな体験を終えて、土に抵抗があった子たちは、いつの間にか土に思い切り触れて遊ぶようになりました。それは「土が活着ている」ということを知ったことも大きいですが、「自分が選んでプレゼントしたものを受け取ってくれた存在」を、「自分の分身」のように感じられたからだとは私は思いました。そんな自分と対象との境界線が溶けて消えていくような状態になることが、畑づくりの「肝」なのだと思うのです。

このことは、農作業が、幼児から低学年くらいのこどもたちの「遊び心」との親和性がとても高いことを知るきっかけでした。幼児から低学年くらいまでのこどもたちというのは、物語の世界と現実の世界を行き来しています。例えば「お

医者さんごっこ」で医者役になって相手(友達、ぬいぐるみなど)を診断してあげるとか、「お家ごっこ」でお母さん役になってお世話してあげるなど、一見ごっこ遊びをしているだけのようで、その役になり切ることによって「じっくりみて直すこと」「やさしく接して、何かをやってあげる」など、実生活の上でも劇的に成長することにつながります。

畑での「野菜さんのお世話」、そのための「土(キンちゃん)へのお世話」という物語は、これまで生まれてからお世話される対象として生きてきたこどもたちが、初めてお世話をしてあげる側になるという、なんとも魅力的な遊びを内包しているわけです。採ったナスが可愛すぎて、食べるのがかわいそうで、一緒に寝て一緒に遊んでいるうちに腐らせてしまった子がいました。でも痛ませてしまった理由はもう一つあって、実はナスの味は好きではなかった(これまで嫌いだった)のです。でも、この経験を通して「腐らせてしまうなら、食べてあげたらよかったんだ」と感じたその子は、それからは自分が育てたものにかかわらず、ナスを食べるようになりました。

農が遊びになる！「農遊び」のはじまり

こども農園2年目では、このように「土を生き物だと思ってかかわる」ということから始まりました。1年目もちろん「社日」の日には土にご挨拶をして、土は大切にしていたわけですが、やはり土は土でした。2年目の、「土は、キンちゃんたち」というイメージ(ストーリー)が体に宿っている子たちは、土への関わり方が変わったように思いました。毎回、キンちゃんたちへのご飯(刈り草)と水をあげることが習慣化してきました。キンちゃんが分解してくれたもの(いわば、キンちゃんのうんち=リン・窒素・カリウムなどの無機物)を根っこからいただいて元気になる「野菜」も、また、自分たちが日々手をかけていることで変化している、という目に見え肌で感じる「実感」となりました。

それらの「お世話」は、良い意味での「遊び」になっているから、こどもたちは真剣に取り組んでいるのだと思います。冒頭に書いたように「こどもたちが遊んでいるように夢中になって学べる時間をつくりたい」というのが、私がずっと追究してきたテーマでした。一方で、農地(畑)は遊び場としての魅力があるとは当初から感じていたものの、そこで営まれる「農業」は、本来生きるため(生存のため)の、生活の営みなので、「遊び」とは対称的(正反対)なものだろうと思っていました。だから当初の「畑のアトリエ」では「畑仕事」の時間と「遊び」の時間をメリハリをつけて、分けて実施していました。

ところが「農」を本質的に探究していくと、農を担うことそれ自体が面白く、「遊び」にもなりうることを感じたのです。私はそれを「農遊び」と呼んで、今、小学校や幼稚園でも実践に取り掛かり始めました。「農」が日常にあることが、こどもたちの遊びの幅をもっと広く、そして深くするのではないかと思います。

こどもの村学園の学園長で、教育学者の堀真一郎は「子どもにとって楽しい学校とは、ラクができる学校ではない。むしろ苦労し甲斐のある大きな仕事があって、しかもそれをやり遂げて、自分自身の成長が実感できる学校だ」といいます。(堀真一郎『きのくに子どもの村の教育』)

現代のこどもたちの「自由」について、この指摘は言い得て妙で、それは学校のみならず、こどもの「遊び」と言い換えることもできると思います。

「こどもたちにとって楽しい遊びとは、ラクができる遊びではない。むしろ苦労し甲斐のある大きな仕事があって、しかもそれをやり遂げて、自分自身の成長が実感できる遊びだ」と。

一般的な遊び論としてロジェ・カイヨワが整理した「アゴン(競争)」「アレア(運)」「ミミクリ(模倣)」「イリンクス(めまい)」という4要素と、パイディア(遊戯)とルドウス(競技)という遊びの高度さの二極軸を拠り所にして、現代の遊び産業(エンターテインメント、アミューズメント、ゲーム)は緻密かつ高度にプログラムされ、私たちの「脳」を喜ばせてくれます。そこには「苦労」や「やり甲斐」や「達成感」もプログラムに組み込まれ、様々な面で、私たちの生活を豊かにしてくれていることも事実です。ですが、人工的にデジタルで「つくられた」遊びがあまりにも多すぎる中、「農遊び」のような自然を相手に「不自由さ」や「思うようにならなさ」込みの遊びがなければ、やはりアンバランスで気持ちが悪いと思うのです。



野菜が育つための栄養をつくるのはキンちゃん(微生物)や小さな土壌動物。キンちゃんたちのご飯は、野菜の枯れたものなど有機物。そんな自然の循環の輪に入ることが「農」の営み。

8. 「農遊び」の先にある可能性

そんな「農遊び」が、こどもたちの日常に解け込むことで、結果的に3つの可能性と希望があると感じています。

一つは、こどもたちが身近な街の中で「農」に携わることが自然になっていくと、それがいわば「自分の役割」になるということです。

哲学者の内山 節は、「かつて村の子どもたちは、自然とともに営まれる村のなかで、自分の役割を与えられ、ゆったりとした成長の時間を持ちました。」「村の子どもたちの「仕事」は、単なるお手伝いではなく、村の関係のなかの一員であり、自分もまた「仕事」をすることによって村の関係を支えていることを証明するもの」だったといいます。(内山 節『子どもたちの時間 山村から教育をみる』)

多くの一般市民(百姓)が農家を家業としていた時代、こどもたちは働き手として頼りにされていました。もちろんそれは世界的に児童労働として問題視され、親の稼ぎや商いのためにこどもの権利がなかった事態を発端に、親からこどもを守るために生まれたのが「学校(義務教育)」という制度でしたから、それが良いことであるというわけではありませんが、今、こどもたちは「こども扱い」されすぎて、身を持て余しているのも事実です。せいぜい「お手伝い」をさせてもらっている存在です。私も「畑のアトリエ」で「農家さんのお手伝い」にこどもたちが参加することをしてきたわけですが、「大人のお手伝い」とか「育ててあげる対象」ではなくて、「町の関係のなかの一員」として、「町の間を支えている」という実感をもてるような、そんな大きな「仕事」「自分の役割」をもてたら、こどもたちは生き生きとし始めると思うのです。町の中に「自分の役割」があるということ、自分が必要とされている、自分がいないと枯れてしまう野菜があるということは、こどもたちが「生きている」ことを支える自信や安心にもつながるはずです。

教育界では「生きる力」という標語が掲げられて久しいですが、生きる力はすでに生まれた瞬間から人は持っているもので、むしろ、すでに体に秘めているその「力」が生きたり、「力」を生かすことの方が大切であるはずです。

二つ目は、農地を守ることができるということ。最初に書いたように、今、維持が難しくなっている担い手のいない「農地」がたくさんあり、宅地化がまだまだ進んでいます。一回、宅地化した土地は農地に戻すことはほぼ不可能です。そ



んな取り返しのつかない課題を前に、私がすぐに農家になることは難しいですし(不可能ではありませんが)、こどもたちをみんな農家にすることもできません(できたら嬉しいですが、その頃にはもう取り返しが付かない)。でも、今、農地をこどもたちの「農遊び」の場にする如果能够できれば、そこでは「生産」も維持できますし、日々の手入はまさに、地球へのプレゼントとしてこどもたちの「役割」「居場所」づくりのきっかけにもなります。何より、農に対するこどもたちの関心が高まり、それは将来的な農地の維持にもつながります。

そもそも農地が維持できることは、こどもたちが自分で育てた野菜を食べられるということだけでなく、地産地消が進めば、こどもたちの食べる野菜の地域自給率にも繋がります。また、防災拠点でもある農地が維持できるだけでなく、こどもたちの遊び場として日頃から通っている場所が万が一の避難場所になり、またそこで野菜を育てているのだから備えにもなります。もちろん緑が多い方が景観もよく、結果的にこどもたちが住みやすい町になるのです。



そして三つ目。こどもたちが自然との関わり合い、与え与えられる、もちつもたれつの「農」を自分たちの手で営んでいく方法を追究していくと、それは、いわゆる昔ながらの「伝統農法」や「自然農法」という持続可能な農法に行き着きます。もちろん、生産効率をあげること、限られたマンパワーで広い農地を維持することなど、都市農業の課題(社会的な課題)から、近代的な農法が行われていることを知ること、学校の社会科の学びになり得ます。しかし、幼児から小学生が初めて出会う「農」の形は、もっともっとシンプルで良いはず。1年目のこども農園で課題になったように、「なんでだかわ

からないけど、うまくいってしまう」成功率の高い方法を最初からとるよりも、想定外の問題に出会ったり、失敗することも含めた「多様な試行錯誤」のプロセスにこそ、こどもたちの「遊び」や「学び」の種があり、より深い実感につながるのですから。そんな、型にとらわれない、こどもたちと探り探り見つけていく農法を「探究型農法」と呼んでいます。

そんな自然に近い方法での「農」の営みは、一人一人から小さな小さな「地球へのプレゼント」であり、結果的に地球の持続可能な環境づくりにもつながっていく可能性があります。そして、何ヶ月、何年、あるいは何十年という時間をかけて、いずれこどもたちは「地球からのプレゼント」を受け取ることになります。それは収穫できる「野菜」であり、それをいただくことで「元気」になること、「生きている実感」、身近な自然が自分の分身になることで生まれる「包まれる安心感」、自分の働きがけによって環境が変化する「実感」、何より「自分の住んでいる場所が好きになる」ことでもあります。

「生きていてよかった」「生きてきてよかった」そう感じられる時間や空間や仲間が、町の中に増えていくことを、「農地をこどもの遊び場にする」活動を通して、実現できたらいい！ 私はそんな願いから「こども農園」「農遊び」を町に広げたいと考えています。

むすび

私が育った長野市街地で、私が幼少期から小学校低学年までを過ごした1980年代後半～90年代前半は、まだまだ緑地や空き地、畑が住宅地の至るところに残っていて、私はそこで過ごすことで日々の学校生活等での「嫌なこと」や「疲れ」から癒されていたと、今振り返って感じています。虫を追いかけたり、石を集めたり、秘密基地をつくったり、穴を掘ったり。そこでの時間はこどもの頃の私にとっては単なる「遊び」を越えて、世界を開拓するような気持ちでした。そこでの「原体験」が今の私を支えていることは間違いありません。

ところが、1998年の冬季五輪の開催に向け、長野市の街並みは大きく変わりました。(もちろんオリンピックのおかげで世界に目を開いたり、スポーツの面白さを知ったり、ピンバッチ集めを楽しんだり、恩恵もいっぱい受けました

が。)特に、私の遊び場にしていた駅周辺エリアは、新幹線の高架橋の建設のため長い間資材置き場と化し、小さな空き地は次第に宅地化されていき、たった5・6年の間に私が遊び場にしていた空き地のほとんどがなくなりました。

時を同じくして、ファミコンをはじめとした魅力的なゲームコンテンツが子どもたちを魅了し始め、持っていない子やゲームができない子は結果的に仲間外れになり、私はとうとう行き場を無くし、一人住宅街で外遊びをするようになりました。

でも寂しくなかったのです。緑地や畑でなくても、近所のどんな小さな路地にも公園にも、いろいろな草が生えていて虫が住んでいることを知っていたからです。別に特別な場所がなくても、自分の足元を見つめれば「小さな自然」「小さな宇宙」があることを知っていたのは、幼い時に緑地や畑で過ごした時に、草花や虫たちが教えてくれたことだったのだと思います。

私は、そんな緑地や畑に恩返しをしたい。あの時、自分を救ってくれた緑地や畑、その中で出会った「小さな生き物」や「土たち」に恩返しをしたい。そしてそんな「原体験」を、今の子どもたちから奪いたくない。できることなら守りたい。それが私が、遊びや農へ関心を寄せ続けていることの原点であることを、この活動をしていく中で気付きました。

どうかうこれ以上、街から農地を減らさず、そこが子どもたちが「生きる」場所にもなりますように。



そして最後にもうひとつ。実は、私が図工の教師から、「農遊び」に踏み込んだ大きな理由があります。図工の時間は、こどもの「もの」との対話の時間でした。それは「農」の営みにも似ていて、人間相手ではなく「もの」を相手に、触れてつくって手応えを得たり、自分の思いを形に表したりすることの喜びを感じる時間です。だから、授業を通していろいろな「もの」との出会いを仕掛けました。「もの」がもっている可塑性、可変性は、子どもたちがイメージを広げ、つくり方を工夫することを可能にしてくれます。トライアル＆エラーの繰り返しの中で、どうにかして自分のイメージを形にする。それは自分の分

身をつくりだすことであり、自分を作り出すことそのものです。生きる喜びがそこにはやはりあるのです。

一方、つくる行為そのもの(時間や体験)に没入しても、つくられたそれ(物質)は、あつけなく捨てられていく姿を目の当たりにしました。あるいは、作品に至るまでの試行錯誤のために費やされた材料やその余りものは、多くの場合、捨てられていくのでした。学期末の大掃除で出るゴミは、90リットルのポリ袋5つ分なんてことも珍しくありませんでした。

そんな状況に疑問をもった私は、ある時からできるだけゴミの出ない授業に取り組み始めました。紙も木っ端もリユースとリサイクルを心がけました。その先でたどり着いたのが「自然物だけでつくる授業」でした。その季節の旬の自然物を採取しにいき、それだけを使って(その中にある色や形を生かして)つくる。余ったものは再び自然に返しにいく。できた作品も、自然の中に飾り、写真撮影をしたのち、場合によってはそのまま自然に返す。それらは、時間とともに自然に分解されて還って、やがてなくなる。その変化そのものが作品になりました。ゴミを一切出さずに、十分に創造的な活動ができることを知りました。

あるとき、子どもが集めた材料の中に植物の種子があり、朽ち果てたその造形物(土と葉っぱと木の実)が解け合って、そこが種子のベッドとなって春に芽吹き、やがてそこから花が咲いたのです！ つくる喜びのためにゴミを出し、ゴミを回収車で運んで処理してもらうこととは全く違う感覚でした。つくったものを自然に還し(贈り)、そこから自然が新しく命を育て、再び私たちに与えてくれる。なんとも気持ちの良い体験でした。

人間は、生態系の循環の中から自ら「はぐれ」大量に消費をして、それを自然にお返しすることすらせず(実際には焼却して灰として自然に還しているとしても、その流れを意識せず)に生きています。それは、果たしてしあわせなこと

なのでしょうか。生態系のまあるい循環の輪の中に、もう一度自分自身が参加すること(こどもたちを循環の輪の中に還してあげること)を、「生きていくために」、もっと大切にしなければと思うのです。それが「農」という創造的な営みを、私が大切に思うようになった大きな理由でもあります。

まあるいのうえん 渡邊 裕樹

(筆者)渡邊裕樹:玉川大学教育学部で教育学を専攻。遊びと学びを結ぶ研究を通し、近代教育を問い直す試みとしての「ワークショップ」を調査・実践。東京学芸大学大学院で美術科教育を専攻し、ワークショップの研究と開発を経て、東京都公立小学校教諭・図工専科となる。自然物や土や火を用いた「造形遊び」の授業を実践。学校教育の教科の壁を越え学びのプロジェクト化を可能にするアート／演劇・映画／建築／農業の実践を模索。学校をまるごと変身させる「アートフェス」や「演劇フェス」、校庭に14軒の小屋を建てるプロジェクトなどに取り組む。2020年教職を離れ、小金井市内の「とをが」にてアトリエを実施しながら街の農地をこどもの遊び場にする活動をスタート。農家と連携した「畑のアトリエ」で、コロナ禍に身近な街の畑でこどもたちの原体験をつくるイベントを開催。2021年よりわくわく都民農園小金井こども農園の講師。2023年より「まちの農と遊びをつなぐ」をテーマにしたまあるいのうえんを発足し、任意団体を経て一般社団法人化。小金井市立南小学校講師(図工科・生活科・総合的な学習の時間)。遊びと学びの空間研究者として全国の保育・教育の現場を取材し『美育文化ポケット』の連載を担当。

<参考文献等>

- ・『使いきれない農地 活用読本』農山漁村文化協会(農文協)
- ・小金井市ホームページ・農業委員会
- ・かわしろひでお『そだててあそぼう 農作業の絵本』農文協
- ・藤原俊六郎『そだててあそぼう 肥料と土づくりの絵本』農文協
- ・鳥山敏子、川口由一『子どもの未来と自然農』フィオーナ(東京 賢治の学校)
- ・Spectater2020 Vol.47『土のがっこう』幻冬社
- ・アクアルーム編『土いじりが楽しくなる本』技術評論社
- ・センターフォーエコリテラシー編『食育菜園 エディブルスクールヤード』家の光協会
- ・ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』中公文庫
- ・ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』講談社学術文庫
- ・鷺田清一『「待つ」ということ』角川学芸出版
- ・ジョン・デューイ『学校と社会』岩波文庫
- ・内山 節『子どもたちの時間』岩波書店
- ・堀真一郎『きのくに子どもの村の教育』黎明書